

これまでにこの研究に関わる研究成果の発表は以下のとおりです。

## 1. 学会

2005年7月 「国際語用論学会」リバ・デル・ガルダ（イタリア）	西阪仰・川島理恵 "Instructional Talk in OB/GYN Settings in Japan"	不妊の訴えで来院した患者さんに対して、医師が基礎体温表の読み方を説明している場面の分析。医師の説明が、患者さんの反応に合わせてどのように展開していくか、基礎体温表という道具がその説明にどう貢献しているか、などを論じました。
2005年8月 「国際エスノメソドロロジー／会話分析学会」ウォーサム（アメリカ） 同上	西阪仰 "Referential practice in instruction at a midwifery clinic"  川島理恵 "Initiating the Instructional Talk During Japanese OBGYN consultations"	助産院における妊婦さんの触診の場面の分析。助産師が手でおなかに触れながら、赤ちゃんの身体の各部位を、お母さんにどのように指し示すことができるのかを論じました。  不妊の訴えで来院した患者さんの婦人科医院での問診の場面を分析。毎朝の基礎体温の測定など、患者さんのセルフケアに関わる事柄について、医師によるわかりやすい説明とはどのような説明なのかを論じました。
2006年5月 「国際会話分析学会」ヘルシンキ（フィンランド） 同上	西阪仰 "Referential practice in prenatal ultrasound examinations"  高木智世 "Institutionality of making a connection between body and mind"	妊婦さん・患者さんのおなかの中の（赤ちゃんの状態も含め）様々なことが、超音波診断・検査において、「ここ」「こっち」という指示表現で指されます。この指示表現がそのつどどう用いられ、理解されているのかを論じました。  ホルモン補充療法を行なっている婦人科クリニックで、更年期治療の問診を分析。患者さんが、自分の性格や心理的ストレスが現在の身体症状の原因であるという考えを、医師に対してどのように主張するかを論じました。
同上	川島理恵 "Collaborative construction of treatment recommendation in Japanese OBGYN consultations"	不妊治療中の患者さんと医師が治療方針の決定に到達するまでの過程を分析。とくに患者さんの意思がどのように表現されるのかに注目しました。
2006年8月 「アメリカ社会学会」モントリオール（カナダ）	西阪仰 "Distributed reference in a technological environment"	妊婦さんの定期健診における超音波検査において、おなかの赤ちゃんが、モニター画面とおなかの上のプロープ（医師が手に持った道具）により、どのようにして認識されるのかを論じました。
2006年10月 「日本社会学会」立命館大学（京都）	西阪仰「生殖医療現場における医療専門家と妊婦との相互行為—技術的環境における分散する指示と行為の連鎖—」	ヘルシンキの学会とアメリカの学会のものを合わせた内容で発表しました。
同上	白井千晶「生殖医療現場にみる空間構造・医療科学技術とコミュニケーションの相互関係」	産科医院お助産院における様々な道具（超音波診断装置、ベッド、机、椅子など）がどのように配置されているか、その配置が診察や健診におけるコミュニケーションにどのような影響を与えるかを論じました。
同上	小村由香「生殖医療現場における医療専門家と妊婦との相互行為—妊婦が抱く胎児への感情について—」	妊婦さんの定期健診における超音波検査において、おなかの赤ちゃんがどのように認識されるか、また、その認識がどのような感情表現（「かわいい!」という表現、笑いなど）を伴うかを分析しました。

2007年5月 「国際語用論学会」ヨーテボリ(スウェーデン)	西阪 仰 "Reference in action sequencing: Deictic practices in ultrasound prenatal examinations in Japanese obstetric and gynecological settings"	再び、妊婦健診における超音波検査において、「ここ」「これ」等の指示表現がどう用いられるかを検討しました。とくに、医師や妊婦がモニター画像と妊婦の腹部に同時に関わるそのやり方に焦点を当てました。
同上	川島理恵 "Practices of instructions on home care during prenatal consultations in Japan"	助産院における妊婦健診において、妊婦に対して助産師が、家で行なうべきことについて、いろいろな指導を行なうことがあります。この指導がどのように組み立てられていくかを検討しました。
2007年8月 「ヨーロッパ学習・指導学会」ブダペスト(ハンガリー)	西阪 仰 "Reference in explanation: An aspect of prenatal examinations in Japanese obstetrical settings"	内診において「ここ」「これ」という指示表現が用いられるとき、超音波検査のときは、まったく異なることが行なわれます。これらの指示表現がどのようにして理解されるかについて、助産院における内診でのやりとりに即して具体的に検討しました。
2007年9月 「日本認知言語学会 シンポジウム」成蹊大学(東京)	西阪 仰「行為連鎖のなかの言語使用: 超音波検査における指し示しの実践」	スウェーデンで報告したものとほぼ同じ内容で報告しました。

## 2. 論文等

2007年	西阪仰・川島理恵「曖昧さのない質問を行なうこと: 相互行為のなかの情報収集」田中耕一・荻野昌弘編『社会調査と権力』世界思想社.	社会調査をテーマとした書物に寄稿したものです。医療やラジオ相談における質問と、それに対する返答が、どのように組み立てられていくかを論じました。そこから、質問票(アンケート)などによる質問がどのような社会的な意味を持ちうるかを考える糸口を探りました。
2007年(印刷中)	西阪仰『分散する身体: エスノメソドロジ的相互行為分析の展開』勁草書房.	人と人とのやりとりが、様々な物理的な物に取り囲まれていることに注目し、そのやりとりと物との関係を社会学に考察しました。とくに実際のやりとり(相互行為)が進行していくなかで、人びとの身体や道具がどのように認識されていくのかを分析しました。比較的大きな著書ですが、妊婦さんの定期健診や婦人科での診察のほか、日常会話、楽器のレッスンなど、扱った場面は多岐にわたっています。
2008年(予定)	西阪 仰・高木智世・川島理恵『女性医療の会話分析』文化書房博文社	2002-2005年度にかけて集めた資料にもとづき、妊婦健診における超音波検査でのやりとりの分析、HRTにおける患者の語りの分析、不妊治療における治療方針の決定の過程の分析、妊婦健診における妊婦からの問題の提示のやり方の分析などを、まとめました。